

W・E・B・デュボイス『黒人の魂—エッセイとスケッチ』(1903年)

— その現代的意義を求めて (第7章から第10章) —

古川哲史(大谷大学)

はじめに

本稿は、19世紀末から20世紀半ばにかけて世界の黒人解放運動、パン・アフリカ運動に多大な影響を与えたアメリカ黒人(アフリカ系アメリカ人)ウィリアム・エドワード・バーガー・ト・デュボイス(William Edward Burghardt Du Bois: 1868-1963)の代表作と言われる『黒人の魂—エッセイとスケッチ』(W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago: A. C. McClurg, 1903)を取り上げ、現代的視座からその書の意義を論じるものである¹⁾。前稿(本誌23号、2018年)²⁾では、『黒人の魂—エッセイとスケッチ』(以下、『黒人の魂』と表記)の序想から第6章までを扱った。本稿では、第7章から第10章までを論じ、最終稿となる次稿では、第11章から第14章および追想に焦点を当て、全体のまとめを提示する³⁾。

なお、この20世紀初頭あるいは世紀転換期に刊行された本書は、今も「黒人論」の古典としてアメリカ内外で広く読まれ続けている。ロバート・ステプト(Robert B. Stepto)はアメリカ黒人の「語り」に関する先駆的研究書のなかで、『黒人の魂』は単に社会科学的研究や社会の不正を追及する言葉を書き綴った書物ではなく、むしろ予言の書(a book of prophecy)であると述べている⁴⁾。また、本書出版100周年にあたる2003年には、*The Souls of Black Folk: One Hundred Years Later* (University of Missouri Press)と題された論集も刊行された。その論集の序文で編者ドーラン・ハバード(Dolan Hubbard)は、『黒人の魂』は他の古典作品と同様に、それぞれの世代に応じて再解釈されなければならないと語っている⁵⁾。本稿もその点に「呼応」(“call and response”)し、日本あるいは東アジアという空間軸・地理軸と、グローバル化の進む現代という時間軸・歴史軸なども意識して論じるものである。

デュボイス生誕150周年(the sesquicentennial anniversary of the birth of Du Bois)にあたる2018年には、デュボイス関連史・資料(Du Bois Papers)を豊富に所蔵するマサチューセッツ大学アマースト校図書館⁶⁾と同大学出版会から、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, 1903. Ed. Shawn Leigh Alexander, Amherst and Boston: UMass Amherst Libraries and University of Massachusetts Press, 2018が出版されている。この新たな版には、付録にデュボイスと交友のあった在米日本人の^{ひきだやすいち}疋田保一(1890年—1947年)からデュボイスに宛てた、黒人歴史学者カーター・G・ウッドソン(Carter G. Woodson)にも勧められて企てた*The Souls of Black Folk*の日本語訳の計画や、その日本語版への序文依頼の手紙(1936年10月15日付)⁷⁾なども含まれている。現在のグローバルな視座からのデュボイス研究の重要性を意識していると思われる。そうした疋田とデュボイスの関係や、日本におけるデュボイス著作の翻訳や主要研究文献については、本稿筆者も共著(2004年)や拙稿(2017年、2019年、2020年)⁸⁾で紹介して

いる。

また、2018年には日本でも、1965年に翻訳・刊行された『黒人のたましい』(未来社)以来のデュボイス単行本の完訳書が、W・E・B・デュボイス(本田量久訳)『平和のための闘い』(ハーベスト社、2018年)として出版された(原著はW. E. B. Du Bois, *In Battle for Peace: The Story of My 83rd Birthday*, New York: Masses and Mainstream, 1952.)。デュボイス生涯の後期や晩年の思想と行動は日本ではあまり紹介や研究がなされていないこともあり、筆者もその意義に言及した書評を試みた⁹⁾。

『黒人の魂』(第7章から第10章)

第7章: ブラック・ベルト

第7章は、南部のブラック・ベルト(Black Belt)と呼ばれる「黒人地帯」における、黒人たちの生活に焦点を当てている¹⁰⁾。デュボイスは章の冒頭で旧約聖書の雅歌から「ソロモンの雅歌」(“The Song of Solomon”)の「わたしは黒くて愛らしい」(“I am black but comely”)を含む節(第1章・第5、6節)を引用し、その下に黒人たちの苦難が報われることを願うかのように、黒人霊歌「教会の墓地に煌めく輝き」(“Bright Sparkles in the Churchyard”)からの短い楽譜を添えている¹¹⁾。本章は、これまでの章と異なり、デュボイス自身の見聞とともに、南部の黒人たちの姿がルポルタージュ形式で描かれている。この形式は、同じく本書の中盤ともいえる第8章、第9章にも引き継がれていく。黒人たちの「生の姿」を描写する試みである。

本章では、ブラック・ベルトと呼ばれる南部の黒人人口が多い地域での、黒人たちの置かれている状況が語られる。まず、デュボイスを乗せた列車が黒人問題が集約されていると言われるジョージア州の赤土地帯に入ることから始まる。

ジョージア州は、このようにわが国の黒人人口が地理的に集中しているだけでなく、他の多くの点でも昔も今も、黒人問題がこの州に集約されてきた観がある。合衆国のどの州をとっても、その住民人口の中に黒人が100万もある州は他にはない、——この100万という数字は、1800年の合衆国全土の奴隷人口に相当する。どのような州も、これほど長期間、せつせと多数のアフリカ人を集めることはしなかった¹²⁾。

そして、デュボイスは黒人人口の増加状況を歴史的に描写しつつ、「黒人専用車」(「ジム・クロウ・カー」)で州都アトランタを後にする(1868年に州都はミレッジビルからアトランタへ移っていた)。その後、アメリカ先住民のチェロキー民族がかつて住んでいた土地を通り抜ける。デュボイスは、「非常に長いあいだ自らの父祖の地を守るためにたたかってきたあの勇敢なインディアン民族の住んでいた土地だ。だが、ついに彼らも『運命』と『合衆国政府』の手でミシシッピ河の彼方に追いやられてしまった」¹³⁾と、本章ではアメリカ先住民への迫害や差別についてもたびたび言及している。

デュボイスを乗せた列車はさらに南下し、いよいよブラック・ベルトに近づき、次のような描写となる。

汽車はブラック・ベルト（黒人地帯）にさしかかったのだ、——かつては奴隷の皮膚でさえ色あせてみえたあの不思議な暗い影の土地、そして今では、そこからは、かすかな聞き取りにくいつぶやきしか、外の世界には聞えてこないのである。「黒人専用車」の乗客の数はふえ、わずかに気分がくつろぐ。ごつい農業労働者が3人、それに白人の浮浪者風のが2、3人乗りあわせ、新聞売りの少年はあいかわらず片隅で売物の新聞をひろげている。太陽はいましも沈んでゆくところだが、わたしたちには大なる綿花の国に入って来たことがわかる、——土はいま黒々と肥えているかと思うと、次にはやせて灰色のところとなり、果樹や廃屋が見える、——といった調子でずっとオールバニイまで続く¹⁴。

その後、列車はブラック・ベルトの心臓部とされるオールバニイで止まるのである。そこでは先住民を追い払い、白人たちが「綿花王国」の基礎を作ったことが述べられる。オールバニイはドーアティ郡に位置する典型的な南部の町であった。南ジョージアの7月の暑さのなか、デュボイスはオールバニイから田舎へと足を運んでいくのである。かつての奴隷制に支えられた大農園の屋敷や畑は半ば朽ち果てていた。ユダヤ人¹⁵や黒人の手に渡ったところもある。そして黒人たちが集まる教会や、掘立小屋とはいえ一つの進歩といえる独立した学校にも出くわす。デュボイスの教育問題への一貫した高い関心も窺える。

ジョージア州のドーアティ郡は、デュボイスにとってブラック・ベルトの過去の悲劇と未来の約束が詰まった特別な場所であった。「南部連合のエジプト」(“Egypt of the Confederacy”)とも呼ばれるこの地は、エジプト文明が奴隷労働に支えられていたように、かつて鎖につながれた黒人の囚人たちが連れてこられ、道路を建設したところでもある。デュボイスは次のように記している。

それから黒い奴隷たちがやってきた。来る日も来る日も、ヴァージニアやカロライナからジョージアに進んでくる足の鎖の音が、これらの豊かな沼沢地に響いた。来る日も来る日も、感覚を失ったものたちの歌が、母をなくしたものたちの泣き声が、そして不幸にあえぐものたちの呪いのつぶやきが、フリント川からチカソワッチ川までこだました。そして、1860年までには西ドーアティに、近代社会でもっとも豊かな奴隷王国が出現していたのである¹⁶。

しかしながら、この地の繁栄は南北戦争による奴隷制廃止やその後の「再建期」の混乱とともに、すでに崩壊していた。そして、「ドーアティ郡では、奴隷貴族の後継者は、ユダヤ人」¹⁷となっていく。デュボイスはユダヤ人の経済的支配のもと、苦難する黒人たちに目を向ける。

この農園は、今ではロシア系ユダヤ人が所有しているが、有名なボルトン大農園の一部である。南北戦争の後、長年のあいだ、黒人の囚人たちが群をなしてこの土地を耕作していた、——当時の黒人の囚人は今よりもはるかに多かったのである。それは黒人を働かせる一つの手段であって、罪の有無などはあまり大きな問題ではなかった¹⁸。

デュボイスのこうした黒人の「囚人労働」に関わる指摘は、当時の問題にとどまらず、その後の時代の司法をめぐる状況、アメリカ社会の人種関係にも影を落とし続けてゆくことになる¹⁹。そして、デュボイスはドーアティ郡の北西部に移動し、「奴隷貴族の甥や、貧乏白人や、ユダヤ人が、土地を力づくで」²⁰自分たちのものにした状況を垣間見るのであった。

なお、『黒人の魂』ではいくつかの箇所です「ユダヤ人」(the Jew, Jews など)に言及があるが、1953年刊行のジュビリー版では、ユダヤ人に対する表現を「移民」(“immigrants”)や「外国人／よそ者」(“foreigners”)などと8カ所で表現を変更している。デュボイスはユダヤ人差別(anti-Semitism)と解釈される可能性を懸念して修正を行った²¹⁾。第二次世界大戦中のユダヤ人迫害の記憶がまだ強く残っており、さらには、1950年代初期のアメリカでの公民権運動の芽生え、マイノリティ問題の社会的可視化、そしてデュボイス自身の、『平和のための闘い』(1952年)で表現されているような、国際的な平和運動への一層の関わりからの配慮もあったのであろう。

第8章：金羊毛の探索

第8章は、南部のかつての「綿花王国」(“Cotton Kingdom”)における黒人たちの生活に焦点を当てている²²⁾。アメリカの詩人で劇作家のウィリアム・ヴォーン・ムーディの詩『野獣』(The Brute)より一部を引用し、その下に黒人霊歌「子どもたちよ、求められる日が来るだろう」(“Children You'll Be Called On”)からの短い楽譜を添えている。黒人の子どもたちに、いずれ行動を促す日が来ることを暗示しているようでもある。章題にある金羊毛(golden fleece)については、「収穫時の真白な綿花畑を目のあたりにしたことがありますか、——黒い大地のうえを漂う、深い緑にふちどられた銀白の雲のような、あの黄金の羊毛を？ カロライナ州からテキサス州にいたるまで、あの黒い人間の海をよぎって泡立つ大波のようにたゆんでいる、あの派手な純白のシグナルを？」²³⁾と象徴的に述べている。

本章では、いまだ生き続ける「綿花王国」での黒人たちの置かれた状況に焦点が当てられる。そして綿花生産に対して黒人労働力の占める重要性を強調する。「こんにち、黒人の状態についてなされる研究が、誠実で、周到であるということはめったにない」²⁴⁾と述べ、第7章で取り上げた黒人地帯に位置するジョージア州ドーアティ郡の事例を論じていく。

1890年には、ドーアティ郡には、1万人の黒人と2千人の白人が住んでいた。しかし、奴隷制廃止後25年を経た時期においても、黒人たちは奴隷制度から引き継いだ浪費的な経済構造から、借金を抱えた小作人としての生活を強いられていた。さらには、テキサス州など豊かな土地での綿花栽培との競争もあり、綿花地帯の所有者たち、ひいては小作人たちの収入は激減していく。ついでデュボイスは、黒人小作人の住環境の悪さを描写する。そして、その理由として以下の4つの点を挙げている。

第一の理由は、長年の奴隷制度の習慣が残されたままということである。第二は、黒人たちが自身がそうした状況に慣らされてしまい、よりよい住居を求めることさえできない点である。第三は、地主たちが、労働者たちの生活水準を高めることが、全体として利益を上げる投資だということに気づいていないことである。第四は、こうした生活状況に置かれていては、労働者の向上心が期待できないということである。そして、このような状況は、黒人たちの家族関係や結婚にも影響している。家族の崩壊・離散が目立ち、白人に比べ結婚年齢が遅れ、独身のままの小作人もいる。性的不道徳も問題化し、売春はほとんど見られないが、別居が増加している²⁵⁾。

さらに、デュボイスはドーアティ郡の黒人全体について、「彼らの特徴づけるものは貧困と無知である、と言ってさしつかえなからう」²⁶⁾と述べる。このような表現にデュボイスのエリー

ト主義的な視線を読み取ることもできるが、「アメリカは、そのすべての息子たちにさしだされた『機会』の別名とはなっていない」(America is not another word for Opportunity to *all* her sons.)²⁷⁾ と、機会と平等をうたうアメリカ民主主義の欠陥を指摘することも忘れてはおらず、次のように記す。

ある人間の集団について、その真の状態を把握し、理解しようとするにあたって、われわれは、えてして微細な事柄に気を取られやすいものだ。われわれは、しばしば、その集団における個々の単位が、脈搏を打つ人間の魂であることを忘れる。この魂は、無知文盲であったり、貧乏にひしがれていたり、または、皮膚が黒く、その行動や、習慣や、考えかたが奇妙ではあっても、なお、この魂は愛したり、憎んだりするし、骨の折れる仕事もすれば、疲れたりもするし、笑いもすれば、苦い涙も流すし、さらには、漠とした畏怖をたたえておのれの人生の冷酷な地平の果てに憧れの視線を投げかけたりもする、——すべてこのようなことは、みなさんやわたしの場合とまさしく変わりはない²⁸⁾。

まさに、黒人の魂が人間としての普遍性をもつということである。続いてデュボイスは、同郡の黒人たちがシェアクロッパー²⁹⁾として綿花単作農業制度の下で働く低賃金労働者となり、綿花価格の下落に伴い、しばしば破産を伴う貧困層が形成される過程を描いている。そして、奴隷制廃止を定めた憲法修正第13条の精神が生かされていないこと、南部では移住民取扱法などで移動の自由が制限されていることを指摘する。こうした非合法的な状況のもと、1899年のサム・ホーズ事件³⁰⁾などが起こるのである。そのうえで、デュボイスは黒人地帯の本質を、鮮やかな切り口で以下のように述べる。

黒人地帯というのは、多くの人々が思ったような、より温和な気候的条件のもとでできる労働の分野へとめざした運動ではなかった。それはもともと、自己防衛のための人々の集合、——経済的進歩に必要な平和と静穏を確保するために、相互の防衛を目的として、黒人たちが寄り集まったものである。この運動は、奴隷解放から1880年にかけて起こった。そして、部分的にしか、その所期の成果を果さなかった。1880年いらいの都市への集中というのは、黒人地帯における経済上のさまざまな機会に失望した人々の対抗運動なのである³¹⁾。

デュボイスはその後、シェアクロッパーあるいは小作人たちの地位が、市場の綿花価格の低下や地代と借金の利息などによって、結果的に報酬を受けない苦役というまでの水準に落ちていることを具体的に示す。その結果、1870年のドーアティ郡では、事実上、黒人の土地所有者は一人もいないとされている。そしてこうした状況の逃げ道として、町(town)への移住が起こるが、それはまた「田舎の罪が町になすりつけられている」³²⁾こととなる。

以上のように、第8章ではデュボイスは、自らの知識と現地での観察をもとに、南北戦争を経て奴隷制廃止(1865年)に続く再建期(1865年—1877年)後のブラック・ベルトの社会状況を論じている。本章の中で、デュボイスが休日の余暇の時間を利用しただけの旅でもって南部を知ろうとする人びとを「車窓の社会学者」(“the car window sociologist”)³³⁾として批判している。デュボイスの南部に対する知識や言説は、自らの体験、社会学的フィールドワークに裏付けされたものであり、本章をはじめ「黒人の魂」を索める本書は「車窓の社会学者」に対

抗するものでもあった。

第9章：主人と召使の息子たち

第9章は、南部のブラック・ベルトにおける黒人たちの生活に焦点を当てている³⁴⁾。デュボイスは章の冒頭でイギリスのビクトリア朝に活躍した女性詩人エリザベス・ブラウニングの「詩人のヴィジョン」(“A Vision of Poets”)の一部を引用し、その下に有名な黒人霊歌「わたしは彷徨う」(“I’m A Rolling”)からの短い楽譜を添えている。

デュボイスはまず、ヨーロッパ文明の傲慢さを指摘し、人種や文明論の視点から次のように述べる。

さまざまな人種の将来の競争においては、適者生存ということが真と善と美の勝利を意味するものとなるように、さらにまた将来の文明のために、ほんとうに立派なもの高貴なもの強いものをすべて保存し、食欲や厚顔さや残忍さというものにひきつづき不当な価値を与えることのないようにすることは、20世紀のあらゆる名誉を重んじる人々のたたかいなのである。このような希望を裏切るものにするために、われわれは、人種間の接触という現象についての良心的な研究に、毎日しだいに向っていかざるをえないのである、——腹蔵のない、公平な研究、さらにまた、われわれの欲求とか恐れなどのために歪曲されたり潤色されたりすることのない研究に、である³⁵⁾。

ここには、20世紀さらには21世紀の現在のグローバルな社会にも通じる人種観が見て取れる。そして、デュボイスは人種を文明とともに研究するに値する有益な対象として、アメリカ南部の事例を取り上げる。その理由として、具体的に4つの点を挙げている。まず初めに、南部では居住地域が必ずしも貧富の格差といった社会的階層ごとに分離されているわけではなく、白人と黒人との肌の色というカラー・ラインで成立していることである。次は、人種間の経済的関係において、黒人労働者が何世紀ものあいだ奴隷として鍛錬され、精神と肉体が形成されてきたことへの考慮なしには、黒人の問題は解決できないという側面である。そして、南部では白人でさえも、新たに出現した「富と権力にたいするあらたな渴望にもえた貧しい白人の息子たち、儉約的で食欲な北部人たち、さらに、無遠慮な移住民たち」³⁶⁾の経済的支配のもとに置かれていると指摘する。黒人についてはより不幸な状況となっている。

デュボイスが指摘する3番目の点は、人種関係における政治的な要因である。まず、黒人たちが自身のなかから模範となる指導者が生まれる必要性を説く。

人格と知性を兼ね備えた鍛錬された黒人指導者たち——技倆をもつ人たち、世を導くべき識者たち、大学教育をうけた人たち、黒人の企業家たち、文化の伝道者たち、すなわち、近代文明を十全に理解し、知っており、黒人社会を把握することができ、それらの社会を教訓と模範、深い共感、および共通の血縁と理想という感化の力によって育てあげ訓練することのできる人たち——を求める緊急な要求が存するのである³⁷⁾。

この部分は本書の第3章で言及されたブッカー・T・ワシントン批判にも見られる、そして後に広く影響力を持つことになる「才能ある十分の一」(“The Talented Tenth”)に通ずる主張で

あろう。そして、デュボイスは、現代における最大の政治的な武器は投票の力として、黒人の選挙権について考察する。

南北戦争後に奴隷制が廃止されたとはいえ、南部の道徳的後退や政治的欺瞞が黒人たちの政治への関りを阻害することになっていた。黒人の上層部の人たちも、「投票者としての彼らの権利の行使を自分たちの種族のうちの不用心なものたちや金づくで動くものたちにゆだね、政治というものにそれ以上つこんだ興味をおぼえなくなったのである。依然として残っていた黒人選挙権は、訓練されることも教育されること」³⁸⁾ もなくなったと指摘している。南部では、選挙権剥奪のための諸法律が、黒人たちの政治活動を妨げる目的をもつのであった。デュボイスは「日ごとに、黒人は、だんだん法律とか正義というものを自分たちを保護してくれる保証としてではなく、屈辱と抑圧の根源であるとみなすようになりつつある」³⁹⁾ と述べている。さらに、その結果、黒人による犯罪の増加も招いており、それを防ぐための教育の重要性を強調している。

デュボイスが4番目の要因と記すのは、黒人の精神面も含めた日常生活における白人との「人間的接触」の問題である。具体的には、何百万にのぼる黒人解放奴隷たちとその息子（子ども）たちの置かれた状況でもある。依然として、白人と黒人とのカラー・ラインが、両集団の知的生活に共通性を持たせず、知的交渉が存在しない。別々の教会に通い、別々の区域に住み、公的な場所でも交わることはない。皮肉にも、かつて白人家族と黒人召使の間に見られた「親密さ」「愛情」といったものも、もはや見られないのである。

デュボイスは本章の最後で、南部の白人の黒人に対する差別や偏見と黒人の状況に言及し、南部の将来について以下のように力説する。

南部の将来がどうなるかは、これらの相対立する見解を代表するものたちが相互の立場を認め、評価し、共感することのできる能力にかかっている。——黒人が、自分の属する黒人大衆を向上させることが必要であることを現在以上に深く理解する能力、また、白人が、フィリス・ホイートリーとサム・ホーズ⁴⁰⁾ とをおなじく卑賤の階級に属するものとして分類する皮膚の色に対する偏見^{カラー・プレジューディス}が、いかに死滅的な悲惨な結果をもたらすかを、これまで以上に明白に理解する能力、その双方の能力に南部の将来はかかっているのである⁴¹⁾。

このデュボイスの白人と黒人に向けたメッセージは、まさに人間の普遍的な「魂」に結びつくものである。本章は「共和国のこの危機的な時期にあたって、カラー・ラインを超える知性と共感の同盟によってのみ、正義と公正とは、勝利を得るであろう」⁴²⁾ と結ばれている。後に、知性・知力と社会運動の融合によって世界的な黒人解放運動を進めていくデュボイスの思想と行動の芽が、ここに既に窺えよう。

第10章：父たちの信念

第10章は、黒人たちの宗教、黒人教会を中心とした生活に焦点を当てている⁴³⁾。デュボイスは章の冒頭でスコットランド生まれの詩人で小説家のフィオナ・マクラウド（ウィリアム・シャープのペンネーム）の詩「薄暗い美の顔」(“Dim Face of Beauty”)の一部を紹介し、その下に奴隷たちの逃亡の合図にも使われたという黒人霊歌「そつと行こう」(“Steal Away Home”)

からの短い楽譜を添えている。

デュボイスは自らを「東部から出てきたばかりの田舎教師」と位置づけ、南部の黒人たちの宗教的儀礼の強烈な雰囲気を目撃し、驚きの念とともに次のように記している。

南部の人跡未踏の森の奥でおこなわれる黒人の信仰復興集会の狂乱というものを、このように目撃したことのない人々には、奴隷の宗教的感情というのはほんのおぼろげにしか理解することができない。このような光景は、言葉で言いあらわされた場合には怪奇で滑稽なものにおもえるであろうが、しかし、眼のあたりにしたときには、その光景たるや畏怖をおこさせるものである⁴⁴⁾。

そして、奴隷の宗教の特色として三つの事柄を挙げる。まずは説教者である。黒人の説教者は黒人たちが自ら生み出した指導者、政治家、雄弁家、「首領」（“boss”）、策士、理想家のすべてであると言う。二つ目は宗教音楽である。アフリカで生まれ、奴隷たちの魂に与えられた悲劇によって変容され、強化され、「ついには法律と笞に駆りたてられて、民衆の悲しみと絶望と、希望とのひとつの真実な表現となった」⁴⁵⁾のである。三つ目は、「狂乱」あるいは「叫び」である。黒人たちに宗教的かつ超自然的な喜びを与えることで生ずる行動であり、霊的交渉でもある。

以上はアメリカでの奴隷解放の時期までの黒人たちの宗教であるが、解放後の現在も黒人教会は黒人たちの生活の中心であり、アフリカ的性格の最も特徴的な表現となっている。ときには、教会は日曜学校であり、保健組合があり、女性団体、秘密結社、大衆集会の場所となっている。教会は道義の保持者であり、善悪の判断の最終的な権威として存在している。このような黒人教会について、デュボイスは以下のように述べる。

このようにして、皮膚の色にたいする偏見と社会的条件によって黒人がきっぱりと遮断されている、あの大きな世界のすべてが、今日の黒人教会のなかに小宇宙として再現されているのが認められるのである⁴⁶⁾。

デュボイスは次に奴隷制廃止後の黒人教会の発展、現在の傾向に言及する。アフリカに起源が求められる自然崇拜は、奴隷船と砂糖きび畑など農園組織によってゆがめられ、血縁関係や親類関係という古くからある絆は崩壊の道をたどる。「家族」の代わりに一夫多妻主義や一妻多夫主義が出現し、離婚も増加する。その中で、聖職者や呪術師の役割は残存し、「奴隷制度によって許容された狭い範囲内で、黒人説教師は生まれたのであり、さらに彼らのもとに、アフリカ出身のアメリカ人の最初の制度である黒人教会が生じた」⁴⁷⁾のであった。その初期は異種混交的なヴードゥー教であるが、主人たちとの交渉、伝道の努力、社会情勢への適応の必要もあり、何世紀か経って黒人教会はキリスト教会となっていったのである。

デュボイスは南部の黒人教会には二つの特徴があると言う。一つは、教会がほとんどバプティスト派およびメソジスト派ということである。前者は農園という限られた生活空間において可視的な洗礼（バプティズム）の儀礼とともに黒人たちを最も引き付けた。後者は、近隣の白人教会との結びつきにおいて発展した。これら二つの宗派は、ともに宗教的感情や熱狂をともしない、黒人たちの間に広まっていった。北部では黒人教会は白人教会との関係を断ち、メソジスト派では各団体が結合し、世界における最大の黒人組織であるグレート・アフリカン・

メソヂスト教会⁴⁸⁾、シオン教会、カラード・メソヂスト教会などが誕生した。

二つ目の特徴は、黒人教会が黒人家庭に先行するものであったことである。奴隷たちの反抗の精神は、奴隷主たちの力によって消滅させられ、18世紀の半ばまでに声を上げることもない経済制度の底へと沈んでしまった。「新たに教えられたキリスト教に体现されている無抵抗の服従という教義以上に、黒人の状態に適合するものはなかった」⁴⁹⁾のであった。奴隷主は、こうした教義を教えることで、黒人に忍耐を強いる術を得たのである。デュボイスは以下のように言う。

奴隷主たちは、つとにこのことを理解した。そして一定の範囲内で、喜んで宗教的宣言を援助したのである。黒人を抑圧し墮落させるこの長期間にわたる制度は、かれ黒人を一個の高価な動産たらしめる、その性格上の諸要素を強調するにいたった。……(中略)……黒人は、現世の喜びを見失った今では、自分のまえに現われた来世についての諸観念に、鋭意とりすがった。復讐をする主の聖霊は、ついに主がその子である黒人たちを導いて故郷に赴かせるだろう最後の^{さばき}審判の日まで、悲しみや苦難に堪えてこの世では忍耐を旨とするよう命じている——これが、黒人にとっては自らを慰めてくれる夢となったのである⁵⁰⁾。

ついでデュボイスは、奴隷制廃止運動に大きな影響を与えたハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe: 1811-1896)の『アンクル・トムの小屋』(1851年-52年)における宗教描写、宗教上の宿命論を、結局は黒人を墮落させるものだと批判する。そして、奴隷制廃止後の解放奴隷たちの宗教や精神が生じさせる二重生活、前稿でも触れた有名な「二重意識」(“double consciousness”)の問題に触れる。

アメリカ黒人はいずれも、黒人として同時にアメリカ人として、つまり、19世紀の潮流にどんどん押し流されてはいるが、他方ではどうじになお15世紀の渦巻きのなかでもがいて生きなければならぬ……(中略)……そしてこのことは、魂をとりわけ悲痛なまでに絞ることになり、疑惑と困惑との独特な観念を生むにちがいない。二重の思考と二重の義務と、そして二重の社会的階層を伴う、このような二重の生活は、二重の言葉、二重の理想を生むにちがいないし、さらに、精神を、見せかけや反逆へと、偽善や過激主義へと、誘うにちがいないのである⁵¹⁾。

こうした黒人たちが抱える「二重」の問題は、合衆国の二つの黒人集団の在り様にも影響を及ぼしている。北部の黒人たちは「過激主義」へと向かい、南部の黒人たちは「偽善的な妥協」へと向かうのである。倫理的に北部の黒人は黒人たちを救う具体的な手段を見いだせず、その苦々しい気持ちがより過激な行動へと走らせ、南部の黒人たちは公に白人と対立することのないよう、沈黙を守り、用心深く策略を練るのである。

しかしながら、デュボイスは黒人たちのそうした葛藤のなかにも、真の黒人の心(the real Negro heart)には深い宗教的感情が育ってきおり、奴隷制時代の逃亡奴隷が目指した自由の象徴でもある北極星(North Star)を思わせる表現で、「過去の輝きの星を見失い、大いなる夜の中であって」⁵²⁾新たな宗教的理想を求めている、と語る。白人のためだけの自由や正義や権利で支配されている「死の影の谷」(“the Valley of the Shadow of Death”)⁵³⁾から抜け出す力を、

宗教的感情に見出すのであった。

おわりに

デュボイスは『黒人の魂』の第7章、第8章、第9章において、自ら南部の州や郡、町、田舎に列車や馬車、徒歩で赴き、南部の黒人の置かれた社会状況、生活を観察している。第7章ではブラック・ベルトと呼ばれる奴隷制が大農園を形成、発展させていた南部のジョージア州のドーアティ郡を訪れ、その概要を記す。そして、第8章ではかつての「綿花王国」における黒人たちの生活の現状に言及する。第9章では南部社会の人種問題を文明論とともに論じる。これら本書の中盤とも言われる3つの章では、デュボイスは自身の観察や体験をもとに黒人たちの生活を描写(スケッチ)し、そこから得られた知見を客観的に分析、理論化して述べようと試みている。その点は、黒人たちの宗教、黒人教会を扱った第10章にも当てはまることである。現地を歩き黒人たちの生活を見聞するなかで、白人支配のもと奴隷制の中で植え付けられた黒人たちの「精神の脱植民地化」(“decolonizing the mind”)の必要性を強く認識させられていたであろう。

「近代黒人解放運動の父」とも呼ばれるデュボイスは、しばしばエリート主義、知性中心の批判されることもあるが、本書に含まれる黒人民衆の暮らしの中に分け入るフィールドワークやルポルタージュ的描写手法などは、アメリカ社会学の先駆的な著作の一つとされる『フィラデルフィア・ニグロ』(*The Philadelphia Negro: A Social Study*, 1899)などですでに十全な経験と蓄積があった。第7章や第8章のもとになる文章の執筆時は、デュボイスは自ら南部に身を置き、「黒人大学」で著名なアトランタ大学の教授であった⁵⁴⁾。そして、「エッセイとスケッチ」との副題を付された『黒人の魂』刊行時(1903年)はまだ35歳の行動力ある若き学者、社会活動家であるが、この著書は、その後のデュボイスの数多い著作とともに、後の世代のアフリカ系アメリカ人指導者たちに大きな影響を与えることになる。

黒人指導者の中には、とりわけデュボイス晩年の共産主義的思想などにより、デュボイスと距離を置こうとした者は少なくない。1950年代から60年代の公民権運動の指導者の一人マーチン・ルーサー・キング牧師(Martin Luther King, Jr.: 1929-1968)も、最晩年にガーナへ移住する前にアメリカ共産党に入党したデュボイスとは、政治的、宗教的に相いれない立場と思われるがちである。しかし、つねに大衆とともに行動しようと試みたキングは、デュボイスが創刊に携わった『フリーダムウェイズ』(*Freedomways*)誌がニューヨークのカーネギーホールで主催した、デュボイス生誕100周年を記念する「国際文化の夕べ」(1968年2月23日)に出席し、「デュボイス博士を讃えて」(“Honoring Dr. Du Bois”)という演説をおこなっている。その中で、1963年に94歳で亡くなったデュボイスについて、キングは「私達は現代のもっともすぐれた人の一人に敬意をあらわすために今夜ここに集まっている」⁵⁵⁾と述べ、次のように語る。

デュボイス博士は、抑圧の体制の要め石が劣等性という神話にあることを認識し、この神話を打破するためにその輝かしい才能を捧げたのでした。

このような巨大な仕事にさらにふさわしい人は他にほとんどいないことでしょう。何よりもまず知識人としての彼を凌ぐものはなく、そして彼は一黒人でありました。しかし彼は黒人であるだけでなく、黒人であることを熱烈に誇りとし、さらに天分と誇りばかりでなく戦

士としての不屈の闘争心をもっていました。

その使命を遂行するため、デュボイス博士は高度の教育を受けた黒人が北部でなら享受する大きな特典を放棄しました。彼はハーバードやベルリン大学からいくつもの学位を受けていたけれども、また、黒人であれ白人であれほとんどのアメリカ人以上に専門的資格をもっていたのであるが、黒人の大多数がそこで生活している南部へ移ったのだった。十分に考えた上黒人が日常受ける罵言や屈辱を共にすることを選びとったのでした。彼は白人の支配者に自分を提供し、その天分を売る代償として多くの賛辞を引き出すことも出来たでありましょう。当時黒人であれ白人であれ彼ほどのものはほとんどいませんでした。彼なら富や名誉を積み上げ、当時の勢力ある有力な人達からの賛辞と物質面での華々しさの中で生活をおくることもできたでありましょう⁵⁶⁾。

そして、キングは続けて、デュボイスが北部での豊かな暮らしをあえて求めず、南部での生活を自ら体験しようとした点に関し、以下のように言う。

代わりに、彼はその創造生活の一部を南部で暮らしました——その大半はつつまじやかな収入、ある時には貧困の中で、そして讃えられること少なく多くのサークルでは無視されて、国外追放の中で生をとじました。

しかし彼はその故国にだけ帰りえなかったのです。彼はそのいつくしんだ祖先の中で、アフリカで死んだのです。彼は哀れなほど無知なアメリカには無視されましたが、歴史には無視されませんでした⁵⁷⁾。

このキングの演説には、デュボイスが1935年に刊行した浩瀚な『黒人たちの再建期』(*Black Reconstruction*)などの著作への高い評価も含めて、当時の公民権運動の指導者であったキングがデュボイスの思想と行動についてどう考えていたかを知ることができる。キングにとって、デュボイスは「黒い巨人」(“Black Titan”)であり、アームチェアの学者にとどまる人物では全くなかったのである。演説の最終部では、「最後に、デュボイス博士の最大の徳とは、抑圧されている全てのものと感情を分かちあうことであり、ありとあらゆる不正にたいして神々しいまでの不満を抱くことであったと言わせていただきたい」⁵⁸⁾と語っている。

キングのこの演説には、デュボイスからの直接的な影響を読み取ることができるだけでなく、表面的には(あるいは白人側からは)それぞれの立場は異なるように見えるとはいえ、アフリカ系アメリカ人の歴史的かつ集合的体験と、知的かつ社会的な繋がりをみることも出来る。デュボイスが大きな影響を受けた元奴隷で偉大なる黒人解放運動の指導者フレデリック・ダグラス(Frederick Douglass: 1818-1895)、そして『黒人の魂』の第3章で痛烈に批判した黒人運動家でライバルともされたブッカー・T・ワシントン(Booker T. Washington: 1856-1915)、そして、公民権運動期のキングやマルコム・X(Malcolm X: 1925-1965)を経て、2009年に第44代大統領となったバラク・フセイン・オバマ(Barack Hussein Obama: 1961-)などへと続く、黒人指導者の繋がりがや流れである⁵⁹⁾。

本稿では『黒人の魂』の第7章から第10章を取り上げた。最終稿となる次稿では、第11章から追想までを扱う。とりわけ、一見まとまりに欠けるように見える本書を締めくくるべく、書き下ろされた第14章、そして本書全体の現代的意義を論じることになる。

【注】

1) 本稿の原書に関しては、筆者所蔵の W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago: A.C. McClurg, 1903. (3版 [刷]、1903年8月1日刊、総 ix+265 ページ) を使用し、適宜、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, New York: The Blue Heron Press, 1953. (Jubilee Edition、以下、ジュビリー版) および W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W.W. Norton and Company, 1999. (A Norton Critical Edition、以下、ノートン版)、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Ed. Henry Louis Gates Jr., Oxford and New York: Oxford University Press, 2007 (The Oxford Du Bois、以下、オックスフォード版。オックスフォード・デュボイス選集の本巻序論は Arnold Rampersad が執筆。)、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, 1903. Ed. Shawn Leigh Alexander, Amherst and Boston: UMass Amherst Libraries and University of Massachusetts Press, 2018 (以下、マサチューセッツ版) などの版を参照した。[付属資料2 : 図1、図2、図3、図4参照]

本書の日本語訳書である W・E・B・デュボア [ママ] (木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳)『黒人のたましい』、未来社、1965年、2006年(新装復刊版) および W・E・B・デュボイス (木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳)『黒人のたましい』、岩波書店(岩波文庫)、1992年(1965年の未来社版の改訳書)からも多くの教示を得た。(本翻訳書は名訳であるが、細かい誤りに関しては、適宜、注等で示した。訳注においても、各章扉に掲載の西洋詩人らの説明はあるが、黒人霊歌については言及がほとんどない。) なお、訳者の表示のないものはすべて拙訳である。引用部分には、現在の基準で見れば「差別的表現」と思われる用語も出て来るが、当時の時代状況や社会状況の反映であり、学術的見地から原書に従って訳したことを御了解頂きたい。

2) 古川哲史「W・E・B・デュボイス『黒人の魂—エッセイとスケッチ』（1903年）——その現代的意義を求めて(序想から第6章)」、『アメリカス研究』、第23号、2018年、41-62ページ。

なお、前稿の注12で、最終章の第14章について「1903年刊の初版や1953年刊の50周年記念版であるジュビリー版には Of が付されている」と記し、該当のページの写真(図4)も付した。ただし、この点は筆者所蔵の初版(3刷、1903年8月1日刊行)や50周年記念版についてであり、2019年8月にマサチューセッツ大学アマースト校の中央図書館「W・E・B・デュボイス図書館」の特別コレクション所蔵の初版本(初刷、1903年4月18日刊行)の現物を見たところ、その版の第14章の章題には Of が付されていないことを確認した。

3) 前稿で言及したように、本書は複雑な構造をもつが、基盤的な第1章から教育を論じる第6章、南部の農民生活に焦点を当てた第7章から第9章、黒人の精神世界を掘り下げた第10章から第14章に分けられることが多い。一方で、イギリスの社会学者のポール・ギルロイは、批評家の多くは本書を3つの部分に区分していると述べた上で、第1章から第3章は歴史的な章、第4章から第9章は社会学的な章で、第10章から第14章までは芸術や宗教、文化といった様々な要素が、伝記、自伝、フィクションなどを通して考察されていると指摘している。(Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, London and New York: Verso, 1993, p.125.) また、最新のマサチューセッツ版の编者ショーン・L・アレクサンダーは、同書で第1章から第4章、第5章から第10章、第11章から第14章と3つに分けている。(マサチューセッツ版、pp. xvi-xviii.) 本書の区分については、前稿で言及した里内克巳『多文化アメリカの萌芽——19～20世紀転換期文学における人種・性・階級』(彩流社、2017年)も参照のこと。

本稿は紙幅の関係もあるが、自らの観察や体験にもとづく第7章から第10章を扱う。本書の構造については最終稿でも触れる。なお、『黒人の魂』における序想、第5章、第11章から追想までは本書のための書下ろしである。いずれにせよ、ロバート・ステプトが言うように、本書は単なる文章の寄せ集めの書ではなく、巧みに編成(orchestrated)されたものである。(Robert B. Stepto, *From Behind the Veil: A Study of Afro-American Narrative*, Second Edition, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991, p.52.)

4) Robert B. Stepto, *From Behind the Veil: A Study of Afro-American Narrative*, Second Edition, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991, p.91.

5) Dolan Hubbard ed, *The Souls of Black Folk: One Hundred Years Later*, Columbia and New York: University of Missouri Press, 2003, p.1. デュボイス研究に現代的かつ新たな諸相を加えている研究に、例えば、思想面から議論する Nahum Dimitri Chandler, *X-the Problem of the Negro as a Problem for Thought*, New York: Fordham University Press, 2014. や「ブラック・パシフィック」の視点などから鮮やかに論じる Etsuko Taketani, *The Black Pacific Narrative: Geographic Imaginings of Race and Empire between the World Wars*, Hanover, NH: Dartmouth College Press, 2014.、前期に比べ研究蓄積の少ない後期・晩年期の思想や活動に焦点を当てた Philip Luke Sinitiere ed, *Citizen of the World: The Late Career and Legacy of W. E. B. Du Bois*, Evanston, IL: Northwestern University Press, 2019. などが挙げられる。

6) マサチューセッツ大学の「旗艦校」であるアマースト校の中央図書館は、デュボイス没後、アフリカ系アメリカ人の地学者であり同大学の総長となっていたランドルフ・ブロメリィ (Randolph Bromery) が尽力してデュボイス関連資料の収集活動が始められた。現在の図書館の特別資料 Du Bois Papers の基礎となっている。なお、同大学の28階建て高層の中央図書館も、1994年に W. E. B. Du Bois Library と名付けられている。

7) Hikida, Yasuichi. “Letter from Y. Hikida to W. E. B. Du Bois, October 15, 1936,” W. E. B. Du Bois Papers (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries. マサチューセッツ版の付録に含まれているのはこの書簡である。

北九州市出身で関西学院の神学部で学んだ疋田保一は、デュボイスの訪日実現を強く願っており、本書簡はデュボイスが1936年12月に来日した際に関西での対応にあたった関西学院予科教授の児玉国之進に宛てたものともなっている。また、疋田は *The Souls of Black Folk* の翻訳に強い関心を持ち、訳業を長野県の日本メソジスト教会の牧師に依頼し、デュボイス本人には日本語版序文を依頼するなど関係者に働きかけていたが、実現しなかった。なお、こうした点を含め、疋田保一については、古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』、明石書店、2004年で論じており、日本における *The Souls of Black Folk* の翻訳の歴史については、部分訳を含めて、古川哲史「日本における W・E・B・デュボイス紹介／研究概観——デュボイス著作の翻訳篇」、『黒人研究』（黒人研究学会、第88号、2019年、126-129ページ）で紹介している。

8) 古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』、明石書店、2004年、古川哲史「W・E・B・デュボイスの生涯と時代——日本訪問（1936年）に関わる試論」、『大谷大学研究年報』、第69集（2017年）、1-45ページ、古川哲史「日本における W・E・B・デュボイス紹介／研究概観——デュボイス著作の翻訳篇」、『黒人研究』（黒人研究学会）、第88号、2019年、126-129ページ、古川哲史「日本における W・E・B・デュボイス紹介／研究概観——デュボイス紹介／研究篇（1920年代から60年代まで）」、『黒人研究』（黒人

研究学会)、第89号、2020年、155-158ページ。

現在、本稿筆者は「日本におけるブッカー・T・ワシントン紹介／研究概観」を準備中でもある。

9) この訳書については、「精神の脱植民地化、学界の脱植民地化に向けて——W・E・B・デュボイスの思想と行動」と自身で見出しをつけた拙稿（書評）もある。古川哲史「W・E・B・デュボイス、本田量久訳『平和のための闘い』、ハーベスト社、2018年12月」、『図書新聞』、3398号、2019年5月4日付、5面。

10) 第7章と第8章は下記の一般向け雑誌に掲載された原稿に修正を加えたものである。

W. E. Burghardt Dubois, "The Negro As He Really Is," *The World's Work*, June 1901, pp.848-866.

原典の文章には、同誌のためにデュボイスの旅行に同行したアングロ・アイリッシュ系のアメリカ人写真家アーサー・ラドクリフ・ダグモア (Arthur Radclyffe Dugmore) による黒人と黒人生活を映した写真が19枚、そして合衆国の州別黒人人口の地図が一枚掲載されている。しかし、デュボイスはそれらの写真や地図を *The Souls of Black Folk* (1903) には転載しなかった。とくに写真のイメージやキャプションが、白人の視点からの人種主義が窺えるものだと判断したのであろう。なお、現在、広く読まれているゲイツとオリバーの編によるノートン版には、参考資料として写真が再掲載されているが、原典にあった10枚目 ("A PARSON AND PART OF HIS FROCK") の写真は省かれている。また、ダグモアについて "a German photographer" (p.195) とドイツ人の写真家と説明しているのは誤りである。こうした点も含め、前稿でも若干言及したように、ノートン版やオックスフォード版には編集の粗雑さが目立つ。両書とも *Selected Bibliography* などにも誤記がある。

11) 聖書からの日本語訳は、聖書協会共同訳『聖書』（日本聖書協会、2018年）にもとづく。

『黒人の魂』で言及される黒人霊歌については、名著とされる Eric J. Sundquist, *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1993. やノートン版も参照。

12) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、155ページ。

13) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、156ページ。

14) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、157-158ページ。

15) ユダヤ人の表現については、注21を参照のこと。

16) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、169ページ。

17) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、173ページ。

18) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、177ページ。

19) デュボイスが指摘した「囚人労働」に関わる司法、社会状況は、アメリカ社会の人種問題と絡み合いながらその後も継続され、現在にまで至っている。近年の警察による「レイシャル・プロファイリング」問題、“Black Lives Matter”（「黒人の命は重要」）運動なども想起されよう。現代の刑務所における人種問題に関しては、受刑者を低賃金労働者として扱う利益優

先型の民営刑務所の問題を含め、日本でも関連書が出版されている。アンジェラ・デイヴィス（上杉忍訳）『監獄ビジネス——グローバリズムと産獄複合体』（岩波書店、2008年）など。本稿筆者もかつてオハイオ州立の6つの刑務所内で3年間にわたり教員として働いた経験をもとに、受刑者のエッセイや詩、刑務所に関わる拙論を含んだ書物を編んだことがある。（古川哲史編『囚われし者たちの〈声〉——オハイオ州立刑務所の中から』、国文社、1998年。）

20) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、181ページ。

21) 1953年刊行のジュビリー版においてユダヤ人に対する表記、表現を修正した箇所については、ノートン版 p. xli にリストあり。ノートン版、オックスフォード版、マサチューセッツ版などは初版（1903年4月18日刊行）にもとづいて編纂されている。日本語訳の初版『黒人のたましい』（未来社、1965年）はジュビリー版にもとづいた書である。

22) 第8章の出典については、注10を参照のこと。

23) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、186-187ページ。

24) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、188ページ。

25) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、193ページ。

26) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、196ページ。

27) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、197ページ。

28) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、197-198ページ。

29) デュボイスは *metayer* という用語を用いているが、*sharecropper*（シェアクロッパー、分益小作人）のこと。

30) 第7章でも言及された、ジョージア州で起きた1899年に起きた黒人青年サム・ホーズ（Sam Hose: c.1875-1899）に対する公のリンチ、焼殺事件。リンチの悲惨さ、非人道性を示す事件として知られる。

31) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、210-211ページ。

32) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、222ページ。

33) 「車窓の社会学者」という訳語は、里内克巳『多文化アメリカの萌芽——19～20世紀転換期文学における人種・性・階級』（彩流社、2017年）からの引用。木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳（未来社版、岩波文庫版）では、「視野の狭い社会学者」と訳されている。

34) 第9章は下記の下記の原稿に修正を加えたものである。

W. E. Burghardt Du Bois, "The Relation of the Negroes to the Whites in the South," *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, July-December 1901, pp.121-140.

35) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、225ページ。

36) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、231ページ。

37) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、235ページ。

38) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、238ページ。

39) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、240ページ。

40) フィリス・ホイトリー(Phillis Wheatley: c.1753-1784)は西アフリカから奴隷として連れてこられた黒人女性。黒人女性で初めて詩集を出版した人物として知られる。サム・ホーズについては注30を参照。

41) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、255ページ。

42) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、256ページ。

43) 第10章は下記の原稿に修正を加えたものである。

W. E. B. Du Bois, "The Religion of the American Negro," *The New World: A Quarterly Review of Religious Ethics and Theology*, December 1900, pp.614-625.

44) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、260ページ。

45) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、261ページ。

46) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、264ページ。

47) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、267ページ。

48) グレート・アフリカン・メソヂスト教会(Great African Methodist Church)は、フィラデルフィアで奴隷として生まれたリチャード・アレンによって1816年に設立されたアフリカン・メソヂスト・エピスコパル教会(African Methodist Episcopal [AME] Church)がもとになっている。

49) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、270ページ。

50) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、270ページ。

51) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、274-275ページ。

なお、デュボイスの有名な「二重意識」については、前稿（本誌23号、2018年）の第1章（45-47ページ）を参照のこと。この点は、次の最終稿でも触れる予定である。

52) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992年、280ページ。

53) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩

波文庫)、1992年、280ページ。「死の影の谷」とは、本来、キリスト教徒が天国に行く際に通らねばならない谷のこと。

54) デュボイスは、1897年にアトランタ大学に教授として赴任。当時の *The World's Work* 誌での肩書は、Professor of Economics and History in Atlanta University であった。

55) Martin Luther King Jr., “Honoring Dr. Du Bois,” *Freedomways*, Spring 1968, pp.104-111. 本稿では以下の訳を使用した。

マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (楠瀬佳子訳) 「デュボイス博士を讃えて」、『黒人研究』(黒人研究の会) 36号、1969年、25ページ。

56) マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (楠瀬佳子訳) 「デュボイス博士を讃えて」、『黒人研究』(黒人研究の会) 36号、1969年、25-26ページ。

57) マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (楠瀬佳子訳) 「デュボイス博士を讃えて」、『黒人研究』(黒人研究の会) 36号、1969年、26ページ。

58) マーチン・ルーサー・キング・ジュニア (楠瀬佳子訳) 「デュボイス博士を讃えて」、『黒人研究』(黒人研究の会) 36号、1969年、30ページ。

59) デュボイスにとっての最大の先達は、やはりフレデリック・ダグラスであろう。1936年12月にデュボイスが来日した際にも、神戸女学院大学や龍谷大学で、「偉大なる黒人指導者」としてダグラスに関する講演を行っている。(『めぐみ』、神戸女学院同窓会誌、30号、1937年7月、8ページ。龍谷大学350年史編集委員会編『龍谷大学350年史』通史編・上巻、2000年、750ページ。) デュボイスはライバルであったとされるブッカー・T・ワシントンに対しても、ワシントン死去の際、*The Crisis* 誌での追悼文で、彼の思想と行動へ批判を加えつつも、“He was the greatest Negro leader since Frederick Douglass”と言及している。(ノートン版、171-172ページ) なお、フレデリック・ダグラスの日本における紹介や学術的受容に関しては、アメリカの学術誌に最新の研究成果がある。Park Soonyoung, “Frederick Douglass in Japan: Reception and Research from the 1930s to the Present,” *New North Star*, Vol. 2 (October, 2020), pp.20-32.

アメリカ黒人、アフリカ系アメリカ人指導者の歴史的な知的水脈、繋がりに関しては、Robert B. Stepto, *A Home Elsewhere: Reading African American Classics in the Age of Obama*, (The W. E. B. Du Bois Lectures), Cambridge, MA: Harvard University Press, 2010. や 朴珣英「人種の壁を越える試み——フレデリック・ダグラスからバラク・オバマへ」、里内克巳編『バラク・オバマの言葉と文学——自伝が語る人種とアメリカ』、彩流社、2011年、87-130ページ、なども参照。

【付属資料2】

W・E・B・デュボイス『黒人の魂—エッセイとスケッチ』（1903年）関連図版

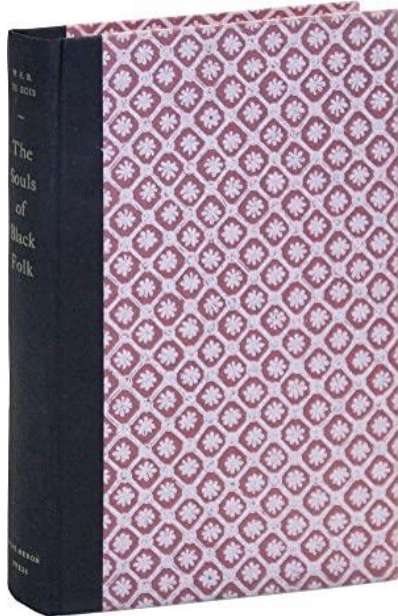


図1：W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, New York: The Blue Heron Press, 1953. (Jubilee Edition、ジュビリー版)（筆者撮影、以下、同。）

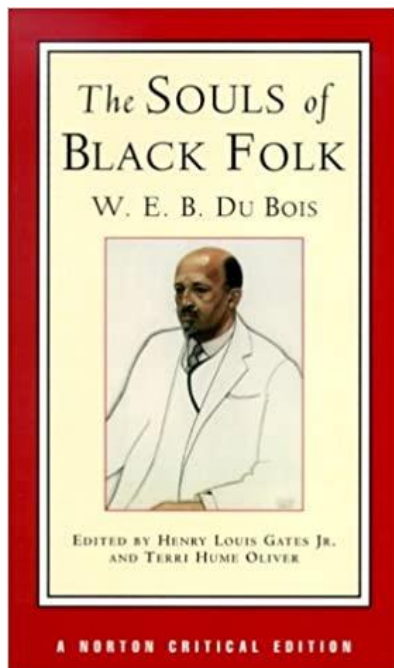


図2：W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W.W. Norton and Company, 1999. (A Norton Critical Edition、ノートン版)

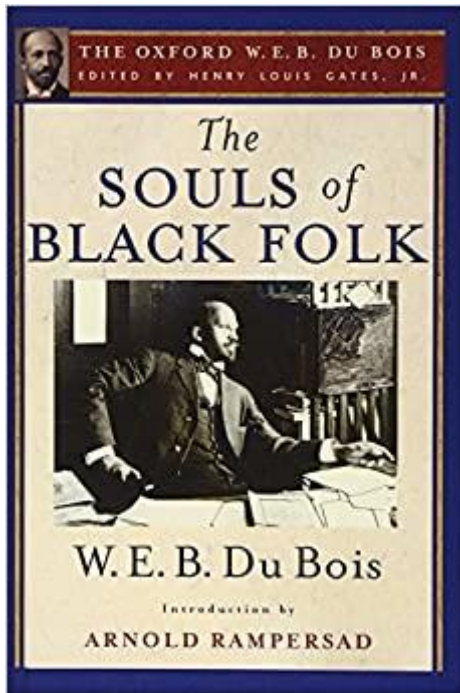


図 3: W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk*, 1903. Ed. Henry Louis Gates Jr., Oxford and New York: Oxford University Press, 2007. (The Oxford W. E. B. Du Bois edition、オックスフォード版)

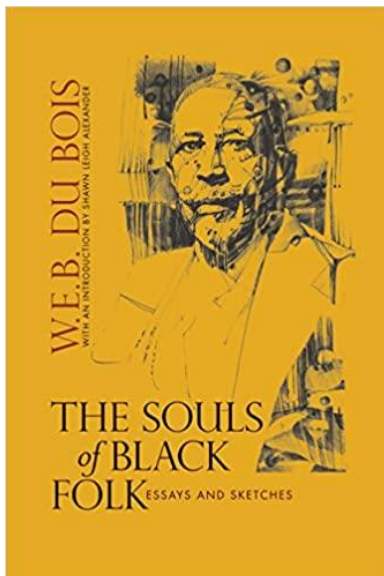


図 4: W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, 1903. Ed. Shawn Leigh Alexander, Amherst and Boston: UMass Amherst Libraries and University of Massachusetts Press, 2018. (150th Anniversary of W. E. B. Du Bois's Birth edition、マサチューセッツ版)